宮崎チャレンジマッチについて

１　目的

(1) 高等学校等の強豪チームを招待し、小中学生との交流イベントや招待試合を行うことで少年種別の競技力向上を図る。

(2) 報道機関と連携・協力することで、２０２７宮崎国スポに向けて県民の関心を高めながら地域スポーツの振興に寄与する。

(3) 本事業を主管する競技団体が競技大会やイベントの企画運営能力を高めることにより、組織的な選手強化体制づくりを目指す。

２　過去１３回の概要

（１）第１回・・・　バスケットボール競技

○指導者・役員・選手で２７９名、役員・補助員含めて、約５００人弱で運営

○入場者数が約３０００名

○宮崎県チーム（延岡学園高校）と招待チーム（明成高校：宮城県）の試合。後半に延岡学園が逆転して圧勝に終わり、その後のインターハイでも見事優勝した。

（２）第２回・・・　ハンドボール競技

○指導者・役員・選手で２０５名、役員補助員含めて、約４００人弱で運営。

○入場者数が約１５００名

○宮崎県チーム（小林秀峰高校）と招待チーム（北陸高校：福井県）の試合。後半にリズムをつかんだ小林秀峰が２３－２０で勝利。昨年のバスケットボールに続き、その後のインターハイで優勝した。

（３）第３回・・・　ラグビーフットボール競技

○指導者・役員・選手・補助員を含めて約５００名弱で運営

○入場者数が約１７００名

○過去２回の大会に続き、強豪の京都代表選抜チームに中学生、高校生ともに見事に勝利した。報道による効果で観客数も多く、大歓声の中で選手たちが発奮した結果と言える。

（４）第４回・・・　ソフトボール競技

○指導者・役員・選手・補助員を含めて約３００名で運営

○入場者数が、２３００名。第１回バスケットボール競技に続く観客数の多さ。

○雨天のため、木の花ドームで開催したが、予定通りに実施できた。
試合は、本県高校男女選抜チームが、同じく大阪府の男女選抜チームに挑んだ。女子の部では０－２、男子の部では０－３でともに敗退したが、ソフトボール競技特有のスピード感あふれる見応えのある大会となり、会場は大変盛り上がった。

（５）第５回・・・　剣道・なぎなた競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約１７０名で運営

○入場者数は、述べ１３００名。選手役員含めて約２０００人の参加。

○大会初の２競技同時開催をした。

試合は、剣道競技で本県男子高校選抜チームと東京都の高輪高校剣道部。女子は岐阜県の麗澤瑞浪高校剣道部に挑んだ。

なぎなた競技では、「形の部」と「組手の部」で本県選抜チームが、熊本県の選抜チームに挑んだ。小学生によるエキシビションマッチ実施や、全国一になった本県出身の佐藤氏による剣道教室、なぎなた競技も、招待監督・コーチにより、選手・指導者含めてなぎなた教室を実施し、大きな刺激となった。

試合は両競技とも招待チームに軍配があがったが充実した大会となった。

（６）第６回・・・バレーボール競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約２８６名で運営

○選手役員含めて約２，９００人の参加。

○１日目は２会場で県内小学生男女別バレーボール教室を実施した。高校のトップレベルの選手との交流により、今後の活動を支える貴重な体験となった。

２日目は女子のチャレンジマッチでは、本県選抜チームが大阪府の金蘭会高校チーム（春高、全国総体、国体の３冠）、男子のチャレンジマッチでは大阪府の大塚高校に挑んだ。試合は白熱したレベルの高いゲーム内容であり、本県選抜チームは善戦したが、男女ともにセットカウント１－３で敗退した。大観衆の中で大健闘した。

（７）第７回・・・ボクシング競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約５８名で運営

○観客数８００名を含め、２日間総合計１，０５８名。

○１日目のボクシング教室は、オリンピック経験者や元アマチュア世界チャンピ　オンによる講師で、保護者を含めて２００名の参加で大盛況であった。２日目は結果として、宮崎選抜チームは６勝９敗で敗れたが、勝つべき選手は　圧倒的な勝利を収め、敗れた選手も全国上位の選手に一歩も引かない試合を展開した。

（８）第８回・・・空手道競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約２５０名で運営

○観客数５５０名を含め、２日間総合計１，１００名。

○１日目の組手テクニックセミナーは、現役日本代表選手による講師で、保護者を含めて３００名の参加で大盛況であった。

２日目は結果として、男女共に宮崎選抜チームが勝利したが、どの試合も接戦で、どこが優勝しても不思議ではなく、決勝戦では男女とも大将戦までもつれ込り、会場は大変盛り上がった。

（９）第９回・・・テニス競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約２００名で運営

○観客数５８９名を含め、２日間総合計８００名。

○１日目のテニス教室は雨天のため室内コート４面で実施。招待校のメニューを行った。小中学生も監督及び選手からのアドバイスをもらい大盛況であった。

２日目は快晴となり、野外で行うことができた。結果として男子が２－１で勝利、女子が０－３で敗戦であったが全国レベルを肌で感じることができ、良い勉強になった。２日間を通して、選手強化、選手育成に大きく影響を与えたと感じた。

（１０）第１０回・・・バドミントン競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約２００名で運営

○観客数１，４００名を含め、２日間総合計１，６００名。

○１日目は県内小中学生を対象としたバドミントン教室を実施し、くまもと再春館製薬所の監督・コーチ・選手の方々に講師を務めていただき、小中学生の意欲喚起につながった。

２日目は団体戦（ダブルス・シングル１・シングル２）を実施した。男女とも１－２で敗戦はしたものの全国レベルの技術を実感でき、その後の国体では女子九州ブロック突破（本国体出場）、男子本国体４位という大きな成果を収めることができた。

（１１）第１１回・・・ホッケー競技

○監督・コーチ・役員・補助員を含めて約１５０名で運営

○観客はコロナウイルス感染拡大防止の観点から、保護者とジュニアクラブの選手のみの観戦とした。

○全国的な緊急事態宣言やまん延防止等緊急措置の中、全国屈指の強豪校である島根県立横田高等学校を迎えることができた。試合は男女ともにレベルの高い技術を見せた横田高等学校が勝利した。コロナ禍で対外試の経験の少ない本県選手とって、全国トップの選手とプレーできた事は、とても貴重な経験となり、大きな刺激を受けた。

（１２）第１２回・・・陸上競技

○県外招待選手５１名を迎え、本県選抜選手４７名と１６種目の競技でチャレンジマッチを実施した。

○全国的な新型コロナウイルス感染拡大により、本県においても医療緊急警報が発令される中、様々な感染対策を講じ有観客で開催した。

○競技は、男子の部でトラック競技５種目中３種目、女子の部はトラック競技５種目全て中京大中京高等学校の選手が優勝し、全国トップクラスの実力を発揮した。

○本県選手は、男子では１１０ｍハードル、走高跳び。女子では走幅跳び、走高跳びで優勝し、インターハイ・国体に向けて弾みをつけた。

（１３）第１３回・・・ウエイトリフティング競技

〇全国屈指の強豪校、京都府立海洋高等学校ウエイトリフティング部１６名（女子３名、男子１３名）を迎え、本県選抜選手１３名（女子４名、男子９名）が６階級（女子２階級、男子４階級）でチャレンジマッチを実施した。

〇各種大会が続き、タイトなスケジュールの中で大会だったが、京都府海洋高等学校の選手は、実力どおり全国トップレベルのパフォーマンスを発揮してくれた。また、ウォーミングアップの取組や、試合に臨む姿勢、雰囲気作りなど、インターハイ・国体を控えた本県選手にとって、とても実りある大会となった。